

異能力バトル世界で拳一つで生き残るTS少女

消火酵素

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

TS転生してより15年。

まさかこの世界で異能力バトルが行われているとは夢にも思わなんだ…

目次

転生、入学、美人さん	1
疾走、師匠、クズ野郎	5
悪魔、変態、クズ師匠	9
日常、部活、メグさん	14
帰宅、渡邊、悪魔モドキ	18
撃破、密談、衝撃の展開	23

転生、入学、美人さん

私は生まれ変わった。

といっても心機一転心を入れ替えてリフレッシュしたとかいう訳ではなく、普通に一回死んで生まれ変わったのである。いわゆる転生とかいうやつで。

死んだときの記憶に関してはいつの間にか死んでいたというのが正しいので覚えておらず。ついでに言うと同世の自分がどんなやつだったかは覚えているものの名前や家族構成は霧がかかったように思い出せず。神様に転生させてもらえるような善行を積んだ覚えもない。

過程も理由も不明ではあるが、とにかく転生して一つ確実なのは前世とは性別が入れ替わったこと。俗に言うTS転生とかいうやつで。私の前世はホモサピエンスのオスであったのでつまり今の私はホモサピエンスのメスである。

かねてより、生まれ変わりがあるとしたら別の性別で生きてみたいと思っていたのは覚えていたので自身が女性であると分かったときは小躍りしたものである。(赤子であったので実際には踊れなかったが)

新たな父母は平凡なサラリーマンと学校の先生であった。幼い子供にしてはかなり大人びた、しかし大人からしたら子供がするにしては異常な思考や行動をとっていたにも関わらず、遠ざけるでもなくしっかりと私を育ててくれた両親には感謝してもしきれないほどである。

そんなこんなで平均的な恵まれた家族の一人娘として新たに生を享けてより15年。私こと田川ムツミは二度目の中学生生活を終え最寄りの私立高校「春ヶ咲学園高等学校」へ進学することになったわけである。



唐突ではあるが私は顔がいい。ステレオタイプな文学系少女な見た目をしていて、スタイルも悪くない。ただし、「絶世の」とか「傾城の」とかいう接頭辞がつくほどの美少女ではなく。探そうと思えばわりといるタイプの美人、すなわち「量産型美人」であると私は思っている。

しかし。しかしだ。世の中の美人という人種の大半はこの量産型美人な訳で、二次元でよくあるクラス一の美少女だとかファンクラブができるほどの美人だとか道を歩けば10人中10人が振り返るような超絶美人なんかはほとんどいないことは前世の経験より明らか。それこそ二次元の中以外は。

つまり量産型美人な私は十分すぎるほど勝ち組な訳で。運が良ければクラス一の美少女となれるのではないのかというアホみたいなことを考えていた。

しかし。入学式当日。早めに家を出て学校に着き、教室を確認して、後ろのドアから教室に入ったところで私は己の見通しがいかに甘かったかを知ることになった。

扉を開けた私の目に飛び込んできたのは、教室の一番後ろの左隅の席の一つ隣に座る少女。腰のあたりまで伸ばされた、絹糸のような金の髪は陽光を反射して淡く輝いていて。ちらと見えた横顔はおよそヒトの顔とは思えないほど完璧な造形をしている。吊り目がちの瞳は彼女の気の強さを表しているようで。有り体に言ってしまうれば彼女は「絶世の」美人だった。

彼女は本を読んでいたが、それを含めてなお声を掛けるのを強く躊躇わせる幻想的な空間を作り出していた。

何秒、いや、何分ほど経っただろうか。しばらく呆然として彼女を眺めていたが、私に気づいたらしく、本を閉じ、髪を押さえながら、こちらを向いて彼女から声を掛けてきた。その仕草一つ一つが、また育ちの良さを滲ませていた。

「あら、こんにちは。貴女もこのクラスの方かしら？」

透き通った、いつまでも聞いていたいと思わせるような声が耳朶を打つ。

「つうん、そうだよ。も、ってことはあなたはクラスメイトなわけ
かあ。一年間よろしくね」

「こちらこそよろしくお願ひしますわ」

とりあえずそれだけを交わして私も席に着いた。と同時に深呼吸。
それにしてもすさまじく緊張した。まさか相手が美人すぎて見惚れ
ると思つてもいなかった。まるでゲームの中から飛び出てきた
ようであった。それにしても、あれほど美しい神の造形のごとき顔を
した人間がこんな私立高校にいるのは少し引つかかる。まあ立ち居
振る舞いからしてこのあたりの企業のお嬢様か何かだろう。

「そういえば名前聞いてなかったな…」

まあ、名前ならこの後自己紹介の時間くらいあるだろう。そのとき
覚えればいい。

そうして私は彼女のことを一旦頭から追い出して、鞆から本を取り
出して読み始めた。



入学式も終わり、やってきたのはクラスでのホームルームの時間。
担任と副担任の話の後、クラスメイトの自己紹介の時間となった。

「こんにちは！ええと、弥生中から来ました藍田メグミです！これか
ら一年よろしくお願ひします！」

と、出席番号1番の愛嬌のある子が元気よく自己紹介を終える。2
番、3番、と続いていき、私の番を経て、ついに紹介前にも関わらず
注目を集めていたあの超絶美少女の番となった。

「こんにちは。二条サヤカです。愛染中学校出身です。これからよろ
しくお願ひします」

そう言つてお辞儀をひとつ。それだけで皆が呆けたような顔にな
る。私も事前に声を聞いておかなければそうなっていただろう。そ
れほどの声だったのだ。彼女の声は。

数秒ほどして次の人が復活し、そのまま自己紹介タイムは終了し
た。先生から翌日の予定について連絡の後、解散の流れとなった。

ちらと二条さんの方を向けば早速男女問わず大勢のクラスメイトが彼女に群がっていた。人気者は大変だね、なんてことを独りごちながらこの後の用事のために私は教室から出た。

が、私と同じタイミングで教室から出てきた人物が一人。確か、二条さんの隣に座っていた人だ。名前は…

「えっと、渡邊くん、だったよね」

まさか話しかけられるとは思っていなかったのだろう、彼はびくり、とわずかに体を震わせてこちらを向いた。

身長は170センチを超えているだろう。前髪は伸ばされていて目に掛かっている。整ってはいるが、特徴のあまりない顔をしている。というより、彼の纏う雰囲気も相まって恐ろしく印象に残りづらい。

「あー、そうだけど。田川さんだっけ。何か用？」

彼―渡邊レイジはこれまた印象に残りづらい声で返してくる。

「いや、特に用とかはないよ。ただ、まだみんな教室に残ってるのに出て行ったから。何でかなって思っただけ」

「…別に。早く帰りたい気分だったから。それに、それ言ったら田川さんもじゃん」

「私はこの後用事あるから。顔出さなきゃいけないところがあるんだよ」

「へえ」

心底興味ありません、といった風に返された。まあ別に構わないけど。

そんなこんなで彼と二、三言交わしていると生徒昇降口に着いた。靴箱から靴を出してスリッパと履き替える。渡邊くんとはここで分かれることになるだろう。なので、彼の方を振り返って別れの言葉を一言。

「じゃあね、渡邊くん。また明日」

「…ん」

彼が片手を上げて返答したのを見届けてから、私は駆け出した。

さて、さっさと師匠に入学の旨を伝えに行きますか。

疾走、師匠、クズ野郎

師匠の家へ向かい住宅街を駆けて行く。もはや何十回何百回と通った道なので目新しさも特になく。迷うこともなく目的地へ進む。ちらと左腕に巻いた時計を確認するとまだ学校から出て8分ほどであった。このペースなら普通の道を使えばあと10分もすれば到着できるだろう。

しかし私はさっさと帰りたいたのであつて。そもそも師匠から「入学式終わったら挨拶に来てね☆」なんて言われていなければぜえつたいに行きたくない。なぜならあの男がクズであるからである。第一私は既に師匠から皆伝を受けているのでもはや奴の元へ行く理由が無いのである。

けれども私は良識のある人物だという自負がある。仮にとはいえ10年近く師匠を務めてくれた人物の言だからある程度は聞いてあげようと思つてこうして向かつているのである。

しかしとにかく私は早くこの用事を終わらせたい。故に。

方向を転換して、道ではなくブロック塀へ向かつて突つ込む。衝突まであと数センチ、というところで軽く踏み込んで跳躍。ブロック塀のてっぺんを掴んで――

「そりゃっ！」

気合いを入れて身体を跳ね上げる。体はぐんぐん上昇していき、遂には民家の高さを越えた。

極力屋根を傷つけないようにして着地する。

「んー、こっからだと… あっちなかな」

屋根の上から方角を確認する。そうしてもう一度足に力を込める。「ふっ！」

再度跳躍する。今度も目当ての方角にある民家の屋根に向かつて跳ぶ。屋根を傷つけないように衝撃を殺して着地。

それを繰り返すこと数回、時間にして3分程度の後。

私は矢鱈と立派な門のある家―師匠邸の玄関前にいた。

◇◇◇◇◇

門をくぐり、玄関を勝手に開けて中に入る。

師匠の家は、彼しか住んでいないにも関わらず異常に大きい。木造平屋建で武家屋敷を想起させるように畳張りの部屋が大半である。
(無論板張りの部屋もある)

私も初めて来たときはあまりの広さにもしかするとどこその旧家の末裔か何かだと思つたほどである。まあそんなことは無かつたが。半ば勝手知つたる家なのでいくつかの部屋を経て、庭に向かいすたすた歩いて行く。この家は屋敷のみならず庭も非常に広い。何せ倉が入つていて余りある広さだ。しかもこの屋敷自体がそれなりの高さの塀に囲まれてるので外から見えにくい。なので屋内でやると確実に床を踏み抜いてしまう師匠との稽古ほほ唐めは常に庭で行われていた。寄り道もしなかつたのですぐに庭に面した縁側に辿り着いた。果たして目的の人物はそこにいた。

こちら側に背を向けて腰掛け、ぼんやりと庭を眺めている半纏を羽織つた中年の男性。伸ばしっぱなしの髪を乱雑に後ろで一つに括つている。

彼は私が来たのに気づいたのか、緩慢な動きでこちらを向いた。目は細められており、無精髭も生えている。人当たりは良さそうだが身だしなみに余り頓着しない、飄々とした印象を他人に与えるこの人物こそが。

「やあ、久しぶりだね、ムツミちゃん」

私の鬨いにおける師匠。その名を山田ゲンといった。

「早速で悪いけどさ、かわいいクラスメイト紹介してくれない?」

―ちなみになかなかのクズだ。

とりあえず殴つた。いい吹き飛び方だ。ざまあみろ。

◇◇◇◇◇

吹っ飛んだ師匠が戻ってきて、数少ない板の間であるダイニングへ

呼ばれた。

「いたいなあムツミちゃん。なんにも殴ること無くない？ほらこんなに
なっちゃった。慰謝料としてお尻触らせて」

大して腫れてもいない頬を抑えて師匠ウッスが何やら宣っている。後半
はガン無視しておこう。

「グズは黙っててください。せつかく貴重な時間を使つて会いに来た
んですから用事があるならさっさと済ませてください。第一そんな
に痛くないでしょうに」

私も別に全力で殴ったわけではないし、奴も衝撃に合わせて跳んで
いたから吹っ飛んだのは見た目だけだ。

「いやさ、気分の問題ってあるじゃん」

なんじゃそりゃ。

そんなくだらない会話を続けながら、師匠は食器棚から湯呑みを取
り出しお茶を注いでいる。私はせんべい（しょうゆ味）を別の棚から
取り出し、席に着く。

お茶を注ぎ終えた師匠は椅子に座りお茶を一口飲んで瞑目する。
私もそれに倣い湯呑みに口をつけた。うまい。

お互いに一服した後、私は師匠に呼ばれた理由を問いかけた。

「それで？今日呼んだ理由はなんですか？」

実は「入学式が終わったら来てね☆」というメッセージが来たのは
昨日の夜だったのだ。バックレようとは思ったが、普通師匠から直接
来いと言われるのは緊急事態の時だけなので、行かないわけにはい
かなかったのだ。

師匠は一度低い声で唸って訳を話し出した。

「いやね、まずは入学おめでとうってというのが一つね」

とりあえず「ありがとうございます」とだけ返す。勿論これが本題
では無いはずだ。

「もう一つはね。こつちが本題なだけどさ」

師匠は一度そこで区切る。

「実はね、昨日君に連絡する直前の話だったんだけどさ。なんか変な
奴がいたんだよね」

「変な奴、ですか」

「そそ。コンビニから帰ってたらさ、仕事帰りっぽいお姉さんが襲われてたんだよ。そいつに」

「それで？その後はどうしたんですか？」

「勿論撃退したさ。ついでにお姉さんのメアドも貰いたかったんだけどね」

「撃退？捕まえなかったんですか？」

「師匠はばつが悪そうに頭を掻いている。」

「いやね・・・逃げられちゃったんだよね」

かなり驚いた。師匠から逃げられる人間はそう多く無いはずだ。その不審者はかなりの手練れだということだろう。

「つまりそれほどの実力者だから注意しておけ、と？」

「いんや。そいつ自体はそんなに強くなかったんだ」

「どういことですか？まさか集団？それとも銃でも使ってくるんですか？」

「どちらでも無いね」

いまいち話が見えてこない。実力だけはホンモノの師匠から逃げる事ができるほどの相手であって、徒党を組んでいるわけでも無いのに大した実力者では無いという。そんな矛盾した情報に少しずつ混乱していく私に、師匠から答えが与えられた。

「そいつはね、ボクが一撃当てた後ね、敵わないと思ったんだらうね」

次に言われた言葉は私をさらに混乱させることとなった。

「空を飛んで逃げたんだよー翼を使ってね」

悪魔、変態、クズ師匠

「空を飛んだ……？翼で？」

何よりも先に困惑させられた。翼が生えた人間なんて物語の中
しか居ない存在である筈であつて。いくら師匠が見た、と言つてい
るとはいえ、流石にそれはあまりにも現実離れしすぎている。

「それはマジですか？」

「マジマジ。大マジさ。一発殴つた後ぶわつて飛んで逃げられちゃつ
たんだつて。ま、信じられないのはわかるけどね」

何せ実際に見たボクが一番信じられなかったんだから、と苦笑いし
ながら師匠は続ける。

「しかもね。どうやらそいつね、人間じゃないっぽいんだよ」

「は？」

再びの爆弾発言、本日二度目の驚愕。再び混乱の中に突き落とされ
る。あまりに荒唐無稽な内容に私の理解が追いつかない。

「鳥人間……とかそういうオチだったりしますか？」

「んにゃ、違うよ。ヒト型の体に背中から翼が生えてたからね。つい
でに言うとなツノも生えてたよ。しかもね、暗かったから見えにくかつ
たけど、たぶん体ぜんたいが真っ黒でちょこちょこ白かった。あれは
間違いなく服の柄じゃあ無いね。ちなみに、どうもガタイからして
男っぽかったけど」

女の子だったら全力で捕まえに行つただけどね、なんて言う師匠^{クズ}
の話は頭に入つてこない。

ぐるぐると脳を回して情報を整理する。まず夜道で女性が襲われ
ていた。これはいい。そして師匠が彼女を助けた。これもいい。師
匠は一発当てたが襲つていた人物には逃げられた。ここは師匠の実
力からするとかなり信じ難いが、まあいい。師匠はその女性の連絡先
を入手し損ねた。これはどうでもいい。問題は次。その犯人は翼を
持つていてツノが生えていて体が黒くて白の模様入りで飛翔して逃
げた。これが分からない。

人を襲う翼持ち全裸真っ黒白まだらツノあり人間。私はいつの間

にファンタジーかSFの世界に入り込んでしまったのだろうか。なんだか悪魔みたいな姿だな、なんて現実逃避を始めてしまう程度には非現実的で、信じられない話だ。

次に考えたのが、これが師匠の嘘であるということ。しかし、師匠はセクハライタズラの常習犯ではあるがこのようなイタズラをするような人間ではない。故に、その線はほぼ無い。

無意識のうちに頭を抱え込んでしまう。大体なんなのだそんな属性を詰め込みすぎた敵キャラみたいなのやつ。与えられた情報が頭の中で悪魔のような姿として結びつく。

悪魔…女性が襲われていたという点からすると、まあ人に仇なす存在であるのは間違いないわけで。そもそも人を襲う目的は何なのか。食事？あるいはそういう嗜虐趣味？実は人類に変わって地球の支配者となろうとしている、とか？あまりに馬鹿馬鹿しい。物語としてもあまりにチープだ。

というより、そういうのは物語の中だからこそ存在を許されるのだ。現実においてみる。世界中が恐慌の渦に巻き込まれること待たないだ。

でも、師匠は実際にそれを見たと言う。そんなファンタジックな存在が居たと言う。師匠への信頼と非現実的事象を拒絶する理性とがせめぎ合い、より混迷を深めていく。

そして、数分の葛藤の末に私が出した答えは。

「まあ…信じがたいですが一応は信じます。それで？特徴は？」

「ああ、うん…自分で言うって何だけどさ、本当に信じるの？」

「…師匠を信頼してるからですよ」

「マジ？ボクそんなに信頼されてるの？じゃあ下着見せ」

「調子のんなクソ野郎」

湯呑みを持ってぶん投げる。キャッチされてしまった。非常に残念だ。

「言っておきますけど、私が信頼したのは師匠がこういう類いの嘘を吐けない、という点です。師匠の人間性はあんまり信頼していませんので」

「ひどくない？なんで？」

「自分の胸に聞いてください。つてああもう。その悪魔モドキの特徴。教えてください」

「心当たらないんだけどなあ…。えーつと、特徴ね」

首をひねって心当たりを探していた師匠が軽薄な笑みを消して、特徴を指折り数えだした。

「んーと、まずは翼が生えてる。長さは片側1メートルくらいかな？」

「はい、1メートルくらいの翼ですね」

「それとね、体は黒い。白のラインが入ってたりもする。後はなんかねじれた感じのツノも生えてる」

「はい。それで？」

「身長はボクより大きかったな。1.8メートルはある」

「はい」

「これは暗かったから見間違いかもしれないけどね、歯がギザギザで尖ってた気がする」

「歯がギザギザ…。ドラキュラみたいですね。次は？」

「ハハ。ドラキュラか。言ってるね。えーつとどこまで話したかな。

あ、そうそう。尻尾生えてたよ。先っぽがとんがってるやつ。とりあえずはそんならいかな」

「なるほど…。こうして聞くと俄には信じがたい特徴ばかりですね」

「まあね。なにげにボクも未だに信じ切れてない。あれはもしかすると夢かなんかだったんじゃないかな、つてね」

「夢オチとかホントやめてくださいよ…。」

仮称悪魔モドキの特徴は覚えた。しばらくはこいつに気をつけておこう。

「という事で…。今日呼ばれた理由はコレで良かったんですか？」

「うん。用事はこれで終わりかな」

どうやら私の予想は正しかったらしい。漸く用事が終わった。開放感に満たされる。背伸びをしながら壁掛けの時計を見ると30分ほど話し込んでいた。

「それじゃあ、帰りますね」

「ちよつと待ってよ」

これで終わりとばかりに私が立ち上がると、師匠が引き留めてきた。

「何ですか」

「久しぶりに一戦やってかない？ほら、悪魔モドキ取り逃しちゃう程度に鈍っちゃってたからさ。弟子の高校入学記念と成長の確認を兼ねて」

「却下で」

そんなお祝いがあつてたまるか。あと師匠コイツの言う成長の確認は、確かに腕前の確認も含まれるが、それ以上に体の成長具合を確かめてくる。ここ二年間くらいは特に顕著だ。マジで死ねばいいのに。

「というよりその悪魔モドキを捕まえるとき『型』使いました？」

「使ってないね。空飛ばれるまで人間だと思つてたから。殺しちゃうマズイと思つてね…」

なるほど。確かに『型』を使えば一撃で戦闘不能にできるだろう。しかし、ただの暴漢に使うものならそれなりの確率で殺してしまう。相手の正体が分からなかった以上、師匠の判断は間違つていないだろう。

「でも、飛ばれても『三式』使えば墜とせたのでは？」

「いやね…ちよつとビックリして使うの忘れてたんだよ…」

「あー、まあ、分かります」

確かに人間だと思つてた相手がいきなり空を飛んだら呆然とはするわな。

「まあ、そういうわけで…今回ちよつとボクやらかしちやつたと思うんだよね。ごめんね…」

「別に責めていたわけではないんですけども…」

珍しく師匠が落ち込んでいる。これは特に誰が悪いという訳ではないのだけれど、責任を感じているのなら励ましてあげるのも吝かでは無い。基本クズだけど彼も頑張っているのだ。

「落ち込まないでくださいよ。今回は運が悪かつたんです。次会つた

ときに倒せばいいんですし、お姉さんも助けられることができたんですから。ほら、元気出してください」

「うわー、ムツミちゃんが励ましてくれてる…。励ましてくれるならお尻触らせ」

「励まそうとした私が間違いだった」

瞬時に距離を詰めて顎をブン殴る。師匠は顔を逸らして勢いを殺したようだけれども躲しきれずに倒れた。ざまあ。

「それでは今度こそ帰りますので。連絡があつたら携帯にお願いします」

倒れたままのクズに向かってそう言い放って部屋から出る。気絶はしていないはずなので、対応はこれで十分だろう。

「帰り道は気をつけてね」

やっぱり気絶はしていなかった。



玄関に向かい、靴を履いて家から出て行く。いつ悪魔モドキと遭遇しても問題ないように気を張ってから無駄に立派な門を出た。

結局、悪魔モドキと遭遇することは無く。気の張り損だったな、なんて思いつつ我が家の玄関をくぐった。

ああ、明日は確認テストだったな。復習しなければ。

日常、部活、メグさん

春ヶ咲学園に入学してから一週間と少し経ったある日の昼休み。

この一週間はとにかく各種説明、授業の準備に追われていた。

けれども、入学してすぐに行われた学力確認テストも難なく熟したし、体力テストは言わずもがな全種目で最高評価を叩き出した。身体測定では身長が少しだけ伸びていて地味に嬉しかった。体重？それは機密だ。私も乙女の端くれだからね。

他には大量の各種オリエンテーションを受けさせられた。その中でもいっとう驚かされたのは、生徒会の権力の強さのこと。私もかつて普通の県立高校で生徒会役員を務めていたことがあった。そこでやった仕事など文化祭、体育祭、クラスマッチの運営と学校誌の編集と発行くらい。生徒会室も空き教室に机をいくつか運び込んだだけ。まかり間違っても予算を握っていたり学校を裏から支配していたりしていたわけでは無かった。私立の高校でもあまり変わることは無いと考えていた。

それがこの学園ではどうだ、詳細は省くが、生徒会は絶対的な権限を持っている。予算なんてその最たるものだ。この分だと学校の運営側との癒着的なものもあつたらそれはそれで面白そうだな、なんて益体も無いことを考えていたら学校紹介がいつの間にか終わっていた。ちなみに生徒会長さんは二条さんにも劣らぬほどの美人だった。聞けばファンクラブもあるとか。すごいな。

他には、部活動紹介なんかもあつた。文芸部があつたから私はそれにした。まあ、見た目がステレオタイプな文学少女だしね。本を読むのも好きだし、書くのはやったことは無いけど楽しそうだな、とは思う。合わなかつたら幽霊部員になればいい。

そんなこんなで過ごした一週間。授業密度もそこまで高くなく、まだまだ余裕がある状況の中。そのくらい過ごせば自然と友達の一人や二人はできるもので。

私は一緒にお昼ご飯を食べる友人を獲得したのである。その方が、今私の前の席に座る藍田メグミさんである。彼女とは三日目の体力

テストで組んだときに意気投合し、すでにメグさん、むっちゃんと呼び合う仲なのである。不思議と人を惹きつける魅力と愛嬌と活発さに溢れた彼女とは非常に話しやすく、今の私の一番の友人なのである。ちなみにめちやくちや美人である。

「メグさんメグさん、部活はどうよう？」

彼女は陸上部所属である。なので肌が若干小麦色に焼けている。

「んー先輩とかマネージャーのひとたちも優しいし、いい感じだよー。まだあんまり走らせてもらってないけどね。むっちゃんは？」

「まあ、まだ体験入部期間中だしね。あー、ウチの部は基本は本読んだりするだけだし、年一で出してる会誌つくるときじゃないとあんま話さないんだって。あ、でも友達はある」

「へー！会誌かあ、楽しそう！あ、あとその友達に今度会わせて！むっちゃんの友達ならイイ性格してるんでしょ？」

「いや私の友達はイイ性格してるって・・・まあ、構わんけどね」「やった！楽しみにしてるね！」

ここで話が一区切りしたので、二人とも弁当を口に詰め込みだす。食べ終わると予鈴まであと少しだったので、お別れして席に戻った。

次は古典なので教科書とノートを鞆から出して準備していると、学食からちらほらと人が戻ってきた。確かこの学食はおいしいと評判だったから今度行ってみてもいいかもしれないな、なんて思っている、大集団が教室に入ってきた。中心にいるのは、言わずもがな我がクラスの女神二条さん。彼女は入学以来、瞬く間にクラスの中心人物となり、他のクラスカースト上位陣らと行動をよく共にしている。（といっても他の人たちが二条さんにくつついているだけのようだが）

私が二条さんと話したのは結局入学式前的一幕を除けば一回も無く。私自身が人に積極的に話しかけるような人間では無く、しかも大体メグさんと一緒にいるので、ついで今日まで話していなかったりする。

ちなみにメグさんは彼ら彼女らとも何の問題も無くコミュニケーションを取っている。彼女は根本的にコミュ強なのだ。性格が反対

の人間は友達になりやすいなんて聞いたことがあるが、メグさんと私を見ていたところ、それは正しいのでは無いかと思われる。

予鈴が鳴る。皆がバタバタと急いで席に着きだした。それとほぼ同時に、教室のドアが開く。すわ先生かと思ったが、入ってきたのは渡邊くんだった。

彼はあまり他人とコミュニケーションを取ろうとしない。二条さんとは授業でペアを作る際に話さざるを得ないし、彼の前に座る六道くんとは事務的な会話をしているのを見る。ただ、初日に話して以来、私は一回も彼と話していないし、彼が他の人物と会話しているのを見たことが無い。昼休みはすぐに居なくなるし、帰宅部なので帰るのも早い。なんだか、まるで人との関わり合いを避けているかのようだ。まあ、それは考えすぎか。

そんなことを考えていると古典の佐藤先生が入ってきた。もう授業が始まりそうだ。さあ、切り替えて集中集中。

ちなみに佐藤先生も超絶美人である。この学校美人多くね？



今日も授業が終わって下校の時間となった。相変わらず渡邊くんはマツハで消えて、帰宅部がそれに続いて教室から出て行く。部活がある人間は同じ部の人が固まって出て行く。

ちなみに再び数人を連れて出て行った二条さんは水泳部だが、他の人々は水泳部とは関係ない。人気者はやっぱり大変だな、なんて思いつつ、メグさんに挨拶をして私も教室から出た。向かうのは文芸部部屋。さて、今日はユキさん居るかな。そんなことを思いながら西日差し込む廊下を歩いて行った。

結論から言えば今日の部室には誰も居なかった。文芸部は自由参加型の部活なので別に毎日参加する必要はないのだ。かくいう私も既に二回ほどサボった。今日は用事もないから参加しようと思っただけである。

空き教室を利用した部室の中には本棚がいくつかと、ふたつ合わせ

られた長机。椅子が八つに本がいっぱい。椅子の一つに腰を下ろし、机の上の小説をいくつか手繰り寄せる。ここの蔵書はなかなか多いし、珍しい本もかなりある。誰も居ないのは寂しいが、無聊を慰めるには苦勞しない。まあ、切りがいいところまで本を読んでいくとしよう。

そう思つて私は手繰り寄せた小説たちの中から一番上にあつたものを手に取つて開く。面白い本だといいな、なんて思いつつ、本の世界に沈んでいった。

帰宅、渡邊、悪魔モドキ

部室で本を読んでいたらいつの間にか日がとっぷりと暮れてしまっていた。時計を見ると、既に7時を回っていた。

最終下校時刻も近づいていたので、鞆を持ち、電気を消し、戸締まりをしてそのまま生徒昇降口へ向かう。

靴箱を見ると、ほとんど人が残っていなかった。文芸部部室はかなり昇降口に近いにもかかわらず、私は下校する生徒たちに気づかなかつたとなると自慢の集中力についても考えものだな。

そんなことを考えつつ、家までの道をてくてく歩いて行く。いくら春も盛りだとはいえ、流石に夜は冷える。スカートを履いて脚を曝け出している女子ならなおさらだ。そういえば、以前は、冬でもスカートを履いているのだから、女子というのは寒さに強いものだと思っていた。しかし、TS転生して初めて、寒空の元でミニスカを履いている女子は寒さに強いのではなく、強靱な意志の力で耐えているだけであるということを理解した。

寒さに震えつつ、とりとめの無いことを考えているとコンビニが見えてくる。喉も渴いたことだし、少し暖を取るついでに飲み物でも買っというこう。



いらっしやいませー、という店員の声と小気味良い電子音を聞き流して店内に入る。まずはカフェオレでも買おうかーっと、飲料を陳列している棚に向かうと、見知った人物の後ろ姿があった。

「ん…渡邊くん？」

「あ？…田川さん？」

そこに居たのは制服こそ着ていなかったが、我がクラスの帰宅王、渡邊レイジ。図らずして、彼との入学式以来二回目の会話となった。

「やっぱり渡邊くんか。何しに来たの？」

「コンビニ来る理由なんて買い物しかないだろ」

「そりやそうだけどさ。じゃあ、何買いに来たの？」

「甘いもんとなんか飲むもん。姉さん…姉に買って来いって」

なるほど、つまり彼はパシラされたわけか。それはご愁傷様なことで。確かにそれなら制服でない理由も分かる。しかし、彼には姉がいたのか。まあ、一回しか話したことはないし、知らなくても当然なことである。

「それはお疲れ様。にしても、お姉さんいたんだね。いくつなの？」

「二つ上。今年三年になる」

「へえ。なら先輩にあたるわけねえ」

「まあ」

会話をしながら、私はカフェオレから宗旨替えしてミルクティーを棚から取る。彼は隣の棚からサイダーを取っていた。

一旦会話を切って会計をする。焼き鳥串が目に入ったから、ねぎまを一緒に買った。ちらと彼の方を見ると彼もちょうど会計を終えたところだった。一緒にコンビニから出た。

「そういえばさ、このコンビニに来たってことは家この辺にあるの？」

このあたりにコンビニはこの一軒しかない。だから彼がこのあたりに住んでいると考えるのは当然かもしれない。だが、私は彼をこの付近で見たことがない。私はなんだかんだ15年近くここに住んでいるし、小学校もこの近辺にあるところに通っていた。80人くらいしか同学年はいなかったから、名前か顔を見れば同窓かどうかは分かる。それを踏まえて、私は渡邊レイジを知らない。だから、彼の家についてはとんと見当がつかない。おそらくは引越してきたのだろう。

「ああ。最近引越してきた。両親が転勤になって。もともとねえさ…姉が春学に通ってたし、ちょうどいいってなって」

そりや知らないわけだ。

「田川さんはここに住んでんの？」

「ん。15年間ここ住み」

そんなことを話しながら、二人で夜道を歩く。その合間に雑談をし

ていくうちに、彼について色々なことを知るに至った。

例えば彼が以前は東京に住んでいたこと、親が転勤になったはいいものの、今度は海外出張に行く羽目になり四日後から姉と二人暮らしになること、好きな食べ物甘いものであること、誕生日が10月であることe t c.

お互いがお互いの情報を話しながら歩いて行くとあと数分で私の家というところまで来た。

「いや、送ってもらって悪いね」

「夜遅くに女の子一人で帰すのは危険だからな」

彼はそんな風に言う。なかなかスマートでイイじゃないか。実際彼と話していると、誰ともコミュニケーションを取らない姿からは想像ができないくらい話しやすいし、話していると彼が案外いい人であると分かってくる。顔も地味目ではあるが比較的整っているし、あと少しだけ他人と会話をするような性格だったら女の子にかなりモテていただろう。

私は、内心彼のことをそんな風に評価していた。

そのとき。

—キャア—

「ッ！」

悲鳴、それも女性のもの。声の高さからして成人か。緊張感があたりを支配する。どちらともなく息を呑んだ。

「今のって」

彼が狼狽えて、そう聞いてくる。

「悲鳴だね。間違いない」

対して私は冷静に返す。師匠と一緒に居るとこういうことはよくあるがゆえだった。

「ッ助けに行かなきゃ」

「あ、ちよい待って」

言うが早いのか、彼は飛び出すように駆けていった。私は一瞬彼より駆け出すのが遅れたため、彼を追いかける形となった。

悲鳴の声の大きさからそこまで離れてはいない。飛び出していつ

た方向も間違えていない。直に着くだろう。ここで走っているときに思い出したのは師匠の忠告だった。

―夜道には気をつけて―

一週間何もなかったから完全に油断していた。どう考えてもフアンタジの住人が犯人なのだ。もつと警戒しておくべきだった。

後悔しながら彼を追っていると再び悲鳴が聞こえてきた。さつきより切羽詰まっている風だった。

「まずい……」

渡邊くんはもう一段スピードを上げた。いくら私が出せば追いつけるとは言え普通の男子高校生にしては早すぎる。普通に走っている私は中々距離を詰め切れずに、とうとう悲鳴の発生地点と思われる場所に近づいた。このままだと彼は間違いなく女性の前に無策で飛び出すだろう。女性が悲鳴を上げている原因が例の悪魔モドキだとしたらそれは非常に困る。だから、私は、彼が角を曲がる直前に、少し速度を上げて彼を拘束した。

「ッ何すんだ」

「静かに」

彼の口を背後から塞いで、慎重に角から先をのぞき見る。すると、そこには。腰を抜かしたのか座り込んで壁を背後にした女性と。

街灯で照らされた黒い体に白いライン。180センチほどの体軀。人にはない、先の尖った尻尾。頭の上から飛び出した捻れた二本のツノ。何より背中に翼を生やした姿。

あの日師匠が見たと言った、悪魔モドキ。それが女性を襲っている姿が在った。

「何だよ……アレ」

渡邊くんは信じられないといった風にそう言葉を漏らす。実際私も信じられない。百聞は一見にしかずと言うが、まさにその通りで。目にした衝撃は計り知れない。

「やめて……こないで……」

と、目の前の謎生物に呆気にとられていると、いよいよ女性の方が危なくなってきた。悪魔モドキは女性の恐怖を増幅させるように

ゆっくりと近づいていく。

「やめろー！」

渡邊くんが悪魔モドキに向かい叫ぶ。反応した悪魔モドキがこちらを向く。

「ひっ」

そこにあつたのはあまりにも凶悪な顔。つり上がった、三日月のような口とそこから覗く鋭い歯。歪に歪む、狂気に染まった目。それら全てが生理的嫌悪感をもたらす。渡邊くんは腰が抜けたようにして蹲ってしまった。

やつは一旦はこちらを向いたものの、すぐに興味を失ったのか、女性の方を再び見る。

このままでは不味い。早急にやつを排除しなければなるまい。渡邊くんは一切役に立たなさそうだからここは私がどうにかする必要がある。そして、私はこの状況を打開する必要がある。

やつとの距離はおよそ20メートルほど。このくらいなら1秒も掛からない。悪魔モドキは女性を弄ぶようにゆっくりと顔を近づけている。

「これなら間に合うか」

一つ深く息を吐いて、精神を統一する。師匠から聞いた話として耐久力はそれほどでも無い。ならば、選択する型は一つ。

右腕を引いて若干前傾姿勢を取り、脚に力を込める。

狙うのは、今まさに女性を食らわんと顔を近づける悪魔モドキ、その胴体。

「食らうがいいよ」

溜めた力を爆発させる。これより放つは最速にして基本の型。

その威力、とくと御覧じよ。

「一式 隼」

悪魔モドキはもの見事に吹き飛んだ。

撃破、密談、衝撃の展開

「一式 隼」

私が目の前の悪魔モドキを殴りつければそれは簡単に吹っ飛んでいった。襲われていたとおぼしき女性――OLかな？――も口を開けて呆然としている。おそらく隣にいた渡邊くんも私が何をしたか分からなかっただろう。悪魔モドキはしらん。

山田流戦闘術（仮称）『一式 隼』。身も蓋もない言い方をすると高速の突進からぶん殴るだけの単純作業。ただし最低でも目にもとまらぬ速さでないと「隼」としては認められない（らしい）ので普通の人間が習得するにはかなりきついだろう。さつきは二割程度だったけれども。

「大丈夫ですか？」

襲われていた女性に尋ねかける。腰を抜かしていたみたいであったがなんとか大丈夫であるとの返事が返ってきた。

女性の手を引いて立ち上がらせていると渡邊くんがやってきた。

「おい！田川さん！」

「どうしたの」

かなり語気が強めである。どうやらどうやら彼は少し怒っているらしい。

「いきなり飛び出していくな！あんなおかしい奴どうみても危ないだろう！」

へたり込んでいた奴に言われましてもねえ…

「でも私がそこで飛び出さなきゃこの人がどうなってたかわかんない。それに私には助けられる自信があった。渡邊くんはさつきの私みたいに動ける？」

私が正論込みで問いかければ押し黙った。まあ悲鳴を聞いただけで駆け出すような正義感のある人間からしたら私が危ないからといって女性を見殺しにしても良かったなんて口が裂けても言えないだろう。

「っ、それでもっ…」

まだ何か言いたそうにしている。まあ前途有望な青年の説教くらいは中身おじさん（推定）が聞いて―

「つまだ!」

私は渡邊くんと女性の襟をひつつかんで投げ飛ばす。

「いてつ、何するん―」

その反論はついで最後まで口に出されることは無かった。なぜなら―

「…思ってたより耐久力ありましたね」

私が吹き飛ばしたはずの悪魔モドキが再び攻撃を仕掛けてきていた。振るわれた爪を飛び退いて避ける。三人全員無事で躲せたが、今度は正面からそれと向かい合う形となった。

「■■■■■■■■■■」

「何言ってるんだかさっぱりですね」

しかし―見れば見るほど数メートル先に立つ姿は醜悪だ。師匠が挙げた特徴とほぼ一緒で、黒い体、鋭い爪に飛行できそうな程度には大きい羽、先が尖った尻尾。それに何よりも三日月型につり上がった口が一番気持ち悪い。それとそり立ったモノを見てなぜ女性を襲っていたのかも理由が分かった。まるで私を欲望のはけ口か、あるいは餌としか見ていないような下卑た顔だ。しかも何を言ってるかも分からないと来たものだ。これは普通なら夜道で無くても遭ったら腰が抜けるだろう。

「でもまあ私は普通じゃないもんで」

恐ろしさならガチモード師匠の方が万倍恐ろしいし、「隼」に対応できていなかったところを見るとそこまで強くも無い。つまりまったく怖くなんて無い。いくら二割程度とはいえ、耐えられたのは予想外だったが、それに、効いてない訳でもない。私が打ち付けたところの辺りが大きく陥没している。たぶん堅い外皮が装甲の役割を果たしたのだろう。

「でも、分かればなんてこたあないですね。次で仕留めます」

集中―再び身体中に力を入れていく。急に雰囲気を変えた私を「獲物」ではなく「敵」、それも格上と認識したのだろうか、悪魔モドキは

慌てたように急に翼をはためかせ、空へと飛び上がった。中々速いが、問題ない。

「逃がすわけ…無いでしょうが…！」

腰だめに拳を構える。既に高度10メートルほどの高さにいる悪魔モドキへ狙いを定める。

「墜ちるといよいよー」

そして私に背を見せたままの、上空のそれに向かって、拳を振り抜いた。

「三式 飛燕」

今度こそは耐えられなかったか——「飛ぶ打撃」は悪魔モドキを打ち抜き、悪魔モドキはそのまま墜落することとなった。

◇◇◇◇◇

「三式 飛燕」は簡単に言うのと空間を殴りつけてその衝撃波、あるいは空気塊を相手に直撃させる技だ。山田流（仮称）唯一の遠距離攻撃でもある。一応拳だけでなく手刀や蹴りを飛ばすことも可能ではある。相手に得物が無いなら完全なアウトレンジから攻撃ができるので非常に重宝する技だ。

さて、そんな「飛燕」が直撃した悪魔モドキは私の目の前に墜落してきた。ここで問題となるのが「どうやってこれを処理するか」である。胸の辺りに風穴が開いていて、先ほどからピクリとも動かないこれは確実に死んでいる。そうなるのであればどうするのが正しいのか。コレが出てきそうなRPGなんかだと時間経過で消滅するのが普通だけれども、現実でそれはまず、ない。まあ「こんなの」がいることもありえないんだけどねえ。

悪魔モドキの遺体をつつき、その堅さに呆れながら思考を回していると、ようやく落ち着きを取り戻したらしい渡邊くんがやってきた。女性はどうかやら気を失っているらしい。

「田川さん、それ…」

少し声が震えている。まあ仕方あるまいて。さっきまで話してた

一般JKが目にもとまらぬ速さで動き、目の前でヒト（の形をした凶悪なナニカ）を平気な顔して殺したのだから。とはいってもどう考えてもこいつはヒトではないし、明らかに人に害為す存在であるため私もそこまで良心が痛まなかっただけである。流石に人間を殺すのは躊躇するだろうし、まだ実際殺めたことはないのだけれど。

「んー、こいつねえ。どうしたらいいと思う？」

「どうしたらって・・・それよりアンタ、大丈夫だったのか？」

「は？」

言うに事欠いて私の心配か。私からすれば渡邊くんのほうがよっぽど大丈夫ではないように見えるのだけれど。

「いや、こんなやつと戦ってたわけだから、その、身体とか」

「別にこんくらいならなんとも。一応鍛えてるしね」

「いや鍛えてるっても・・・」

明らかに納得がいつてない顔をしてらっしゃる。まあそうよな。

「私のことはまあいいとして。大丈夫といえばあの女の人ケガしてなかった？」

少し先で横たわっている女性に目をやる。緊急避難とはいえ投げたままだったからケガが心配だった。胸は微かに上下してるから死んではないみたいだけだ。

「あ、ああ。気絶してるだけでケガとかは問題ないと思う」

「ん、そう。よかった」

女性が無事だったと聞いてホッとした。仮に私が放り投げたせいでケガとかしていたら片手落ちなんて話じゃない。

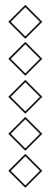
「まあ、無事だと分かったところで『コレ』どうするか話し合わない？」

一旦意識の外に置いていた悪魔モドキに目を向ける。相変わらず凶悪な面がそこにあった。渡邊くんが息を？んだ。

「どうにかするってたって・・・」

当たり前の話ではあるが私に死体処理の経験はない。彼も同様だろう。つまりここからは素人二人がどうにかして完璧に証拠を隠滅しなければならぬということであった。

「・・・とりあえず考えを出していこう」



「ダメだねこれ」

「ダメだなこれは」

女子高生と男子高校生が二人、人気のない夜道に蹲って死体の処理方法を考えているという一見猟奇的な絵面は案外長くは続かなかつた。警察に通報するにも起こったこと全てを話さないといけないし、あんな不思議経験は決して信じてはもらえないだろう。そういうわけでは警察に引き取ってもらおうという案が潰れてからは何方もゴミみたいな意見しか出せなかった。

「埋めるとかどうかな」

「その辺の空き地とかだったら100パー即バレするだろ… 山に行くにもこの時間から行くには遠すぎる」

だとか、

「海に沈めるとかはどうだ」

「まずこれを海までバレずに持っていける？」

だとか、

「燃やす」

「別の意味で通報されるから却下」

だとか、

「いつその事放置する」

「明日の朝はこの辺は規制線だらけだろうな」

だとか、愚にもつかない案が大量に出ることになった。

「あー、もうこれ信じてもらえない前提で警察に通報したほうがいいような気がしてきたんだけど」

「そうよねえ… 素人が完璧な隠ぺいを試みるにはちよつとばかし無理があったかあ」

結局いい案は一つも出ることはなく、ひたすらに無駄な時間を過ごすことになった。

「… そういや、悪かったな」

110番をかけようと電話を取り出していると彼がそんなことをのたまった。

「悪いって、何が？」

「悲鳴が聞こえたとき、田川さん止めてくれてただろ。それに、それから先も何回か」

「うん、止めたね」

絶対確なことにならないと思ったからね。

「その…：：～」

悪かった」

「いや、別にそこは気にしてないよ。結局女性を助けられたわけだしね」

これは本心。私のモットーは「知り合い以外大体どうなつてもいい」ではあるけれど、あの状況で見捨てて翌朝のニュースに死体が見つかったとかなっていたら流石に罪悪感を覚える。

「まあ、私からしたらキミの勇気ある行動をむしろ褒めたいんだけどね」

とまあ、賛辞をぶつけると少し照れたように首の後ろを掻いていた。初心な反応が少しだけかわいらしく見えた。

「それじゃあ、通報するよ」

110番をかけるのなんて初めてだから、少し緊張して変な宣言までしてしまった。先ほど悪魔モドキと対峙した時の100倍は緊張しているな、私。

そうして1, 1, 0と一つ一つ確認しながらゆっくりとタップしていき、ついに発信ボタンを―

「それは困りますわ」

―押すことはできなかった。突如、何かが私の携帯のあった場所を通り抜けた。辛うじて、手を引いて携帯が真つ二つになることは避けられたが、例え携帯が両断されていたとしても、それは目の前で起こっている事実からすれば全くの些事であつただろう。

「そんな…：：：：：：：：：：：：：：～」

渡邊くんの声が震えている。目の前の事実がどうにも受け入れ難いらしい。かくいう私も信じられない。

なぜなら、下手人は。

「どういうことか教えてくれるかな… 二条さん」

「見ての通りですわ」

刀の切っ先をこちらに向け、油断なく見つめながら、金を溶かし込んだような髪を持つ美少女、二条サヤカは私たちにそう言った。